

# スポーツボランティアへの参加を検討する際に生じる制約とその解消 行動に関する研究

備前嘉文\*

## 抄録

近年、オリンピックやワールドカップをはじめとする国際的なメガスポーツイベントや、参加者が1万人を超える大規模な都市型マラソン大会が全国各地で開催される中で、大会の運営をささえるスポーツボランティアの重要性が高まっている。しかしながら、スポーツボランティアに関しては、参加希望はあるものの、全国・国際的なスポーツイベントにボランティアとして関わる機会は少ないのが現状である。本研究では、実際にスポーツイベントにボランティアとして参加した人を対象とした調査から、スポーツボランティアへの参加を検討する際にどのような制約が生じるかを明らかにするとともに、それらの制約をどのように解消して実際のボランティア参加に至るかについて検討を行った。スポーツボランティアへの参加を検討する場面に合致するように項目の精査・分類・語彙の修正をおこなって作成した調査票を用いて、奈良マラソン2018 ボランティア事前説明会の会場においてアンケート調査を実施した。説明会の受付時に903名に調査票を配布し、終了時に会場の出口で回収を行ったところ、460部を回収した(回収率50.94%)。その後、回答が不完全なものを取り除き、最終的に400部を分析に用いた。本研究で分析に用いたサンプルの属性については、性別に関しては男性256名(64.2%)、女性143名(35.8%)、未記入1名であり、平均年齢に関しては57.73歳(標準偏差17.54)であった。参加者の性別と生じる制約の関係について検証を行ったところ、男女間で制約に関する各要因の平均値に有意な差は見られなかった。一方、制約を解消する交渉行動とスポーツボランティア参加の関係については、時間の管理( $t(394) = 2.367, p < .05$ )とスキルの獲得( $t(394) = 2.742, p < .01$ )について、グループ間で有意な差が見られた。このことから、日頃から時間の管理やボランティア参加に向けて必要なスキルの獲得につとめるといった取り組みを行うことによって、実際のスポーツボランティア参加回数にも影響があることが明らかとなった。

キーワード：スポーツボランティア，制約，交渉行動，スポーツイベント

\* 國學院大學人間開発学部 〒225-0003 神奈川県横浜市青葉区新石川 3-22-1

# Study on constraints and negotiation arising in considering participation in sports volunteering

Yoshifumi Bizen \*

## Abstract

Due to the popularity of international mega-sports events including the Olympic Games and the World Cup, as well as large-scale urban marathons with more than 10,000 participants, sports volunteers supporting such events have become increasingly important. However, despite the desire for participation, opportunities for volunteering in national and international sports events are still minimal. What are the factors behind this absence of actual participation? In this research, we clarified what kinds of constraints arise in relation to volunteering in sports by surveying people who actually participate in sporting events. We also examined how the volunteers resolve constraints, thereby leading to actual volunteer participation. We conducted a questionnaire survey with volunteers who participated in the Nara Marathon 2018. Survey forms were distributed to 903 participants, and 460 copies were collected (recovery rate: 50.94%). After that, we removed incomplete answers and ultimately used 400 copies for analysis. Regarding the attributes of the sample, 256 males (64.2%), 143 females (35.8%), and 1 individual who did not specify a gender took part, and the average age of the respondents was 57.73 years (SD: 17.54). We examined the relationship between gender and constraints, and our findings did not indicate any significant factors in this regard. Conversely, examining the relationship between negotiation behavior and sports volunteer participation, a significant difference emerged between the groups in terms of time management ( $t(394) = 2.367, p < .05$ ) and skill acquisition ( $t(394) = 2.742, p < .01$ ). It therefore became clear that improvements in areas such as time management and skill acquisition are effective for increasing the actual number of volunteers in sports events.

Key Words : Sports Volunteer, Constraints, Negotiation, Sports Event, Participation

---

\* Kokugakuin University, Faculty of Human Development, 3-22-1 Shin-Ishikawa, Aoba, Yokohama, Kanagawa Japan, 225-0003.

## 1. はじめに

近年、オリンピックやワールドカップをはじめとする国際的なメガスポーツイベントや、参加者が1万人を超える大規模な都市型マラソン大会が全国各地で開催される中で、大会の運営をささえるスポーツボランティアの重要性が高まっている。しかしながら、スポーツボランティアに関しては、成人の過去1年間のスポーツボランティア実施率は5.3%と低く、活動内容に関しても【「地域のスポーツイベント」大会・イベントの運営や世話】、「【日常的な活動】スポーツの指導」、「【日常的な活動】団体・クラブの運営や世話」が中心となっており、全国・国際的なスポーツイベントにボランティアとして関わる機会が少ないのが現状である。その一方で、今後のボランティア実施希望に関しては男女ともに20%以上の回答者が「行いたい」と回答していることから、潜在的なニーズはあると考えられる(笹川スポーツ財団, 2018)。このように、参加希望はあるものの、実際の参加に繋がっていない背景には、どのような要因があるのだろうか。これまでに行われたスポーツボランティアに関する研究のほとんどは、ボランティア参加者の動機に焦点をあてたものであった(松岡・小笠原, 2002; 田引, 2008; 松永, 2012)。よって、それらの研究では、参加の意思や意欲はあるものの、条件が整わないために参加が叶わなかった人は対象とされてこなかった。

人がレジャー活動への参加を検討するにあたりその行動を阻害する要因を「制約」(constraints)と呼ぶ。そして、制約に関しては、個人の心理的状況や置かれた立場に由来する「個人内の制約」(intrapersonal constraints)、一緒に参加する人との関係など他者との関係に由来する「対人的制約」(interpersonal constraints)、そして、イベントが開催される日程や天候など環境や状況に基づいた「構造的制約」(structural constraints)の3つに分類されている(Crawford and Godbey, 1987)。また、制約を解消するための行動については「交渉」(negotiation)と呼ばれ、「金銭的管理」(financial management)、「時間の管理」(time management)、「対人的調和」(interpersonal coordination)、「スキルの獲得」(skill acquisition)の4つがあるとされる(Jun and Kyle, 2011)。制約と交渉が実際の参加に及ぼす影響に関しては、これまでHubbard and Mannell (2001)をはじめ、さまざまな研究で検討が行われてきた。その中で、近年では、図1に示すような関係が、レジャー活動への参加における交渉行動のプロセスとして示され

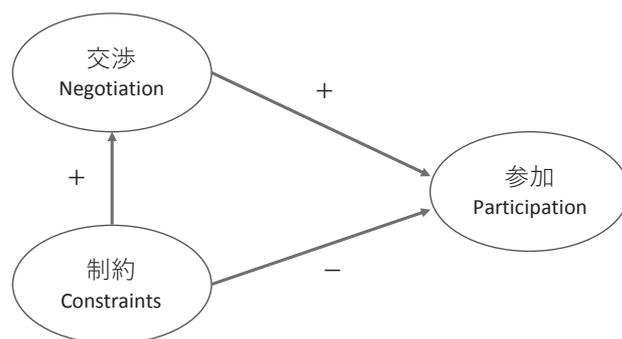


図1 活動参加における交渉行動のプロセス

ている。

しかしながら、レジャー活動への参加を検討するにあたり生じる制約やその制約を解消するための行動である交渉に関しても、研究において対象となるイベントがスポーツ観戦への参加(みるスポーツ)と、マラソンやゴルフといったスポーツ実施(するスポーツ)が中心であり、スポーツへの関わり方の「する・みる・ささえる」の中で、「ささえるスポーツ」への参加を検討する際に生じる制約や交渉を扱った研究はほとんど行われていない(Crawford and Godbey, 1987; Petrick et al., 2001; Trail et al., 2008; Kim and Trail, 2010; Casper et al., 2011)。

## 2. 目的

実際にスポーツイベントにボランティアとして参加した人を対象とした調査から、スポーツボランティアへの参加を検討する際にどのような制約が生じるかを明らかにするとともに、それらの制約をどのように解消して実際のボランティア参加に至るかについて検討を行うことを目的とする。

## 3. 方法

本研究では、上記の目的を達成するにあたり、以下の手順に沿って研究を進めた。まず、文献調査として、レジャー活動への参加を検討するにあたり生じる制約とその制約を解消するための行動である交渉について海外の先行研究を中心に整理を行い、本研究で対象とするスポーツボランティアへの参加を検討する場面に合致するように項目の精査・分類・語彙の修正をおこなった。次に、文献調査で抽出された制約および交渉に関する項目を用いて、実際にスポーツイベントにボランティアとして参加した人を対象にアンケート調査を実施した。調査は、2018年12月に開催された奈良マラソン2018に個人ボランティアとして参加した人

表 1. 各項目の記述統計

	M	SD	$\beta$	CR	AVE
<b>個人内の制約 (Intrapersonal Constraints)</b>				.70	.38
私にはボランティア活動を行う十分な時間がない	2.48	1.14	.07		
私にはボランティアの他に多くの責務がある	2.76	1.19	.63		
私には自由に使えるお金に制限がある	2.94	1.20	.51		
私にはボランティア会場まで行く交通手段がない	1.86	1.06	.60		
<b>対人的制約 (Interpersonal Constraints)</b>				.82	.60
私の友人はボランティア活動を行っていない	2.38	1.27	.77		
私の周りにはボランティア活動を行う時間がある人がいない	2.25	1.13	.85		
私は一緒にボランティア活動を行う人がいない	2.17	1.23	.70		
<b>構造的制約 (Structural Constraints)</b>				.79	.55
私はボランティア参加に関する規制や条件はととても厳しいと思う	2.05	.99	.85		
私はボランティア活動に関する情報がとても少ないと思う	2.47	1.09	.68		
私はボランティア活動を行う場所の安全を心配している	2.24	1.13	.70		
<b>お金の管理 (Finance Management)</b>				.76	.52
私は日常生活においてお金の管理をしっかりしている	3.60	1.14	.79		
私は節約をしている	3.41	1.02	.83		
私は生活費の範囲内でボランティア活動に参加している	3.68	1.16	.52		
<b>時間の管理 (Time Management)</b>				.80	.58
私はボランティア活動に参加するために日程の調整をしている	3.62	1.15	.67		
私はボランティア活動を優先して行動している	2.84	1.13	.81		
私は早く起きて（または遅くまで起きて）ボランティア活動に参加する時間を作りだす努力をしている	2.97	1.26	.79		
<b>対人的調和 (Interpersonal Negotiation)</b>				.85	.66
私は家族や友人をボランティア活動に参加するように誘っている	2.68	1.23	.85		
私は一緒にボランティア活動に参加する人を探す努力をしている	2.52	1.19	.97		
私は自分と同じ趣味を持つ人を探すように努めている	2.85	1.21	.57		
<b>スキルの獲得 (skill acquisition)</b>				.92	.79
私はボランティア活動を行うために必要な能力の向上に努めている	2.98	1.12	.93		
私はボランティア活動を行うために必要な技能の習得に努めている	2.82	1.13	.93		
私はボランティアに関する新しい情報を取り入れる努力をしている	3.07	1.16	.81		

を対象に実施した。調査の具体的な手順としては、2018年11月17日、18日、24日の3日間に奈良市および天理市で開催された奈良マラソン 2018 ボランティア事前説明会の会場において受付時に調査票を配布し、説明会終了時に会場の出口で回収を行った。

#### 4. 結果及び考察

レジャー活動への参加を検討するにあたり生じる制約とその制約を解消するための行動である交渉についての先行研究を整理し、スポーツボランティアへの参加を検討する場面に合致するように項目の精査・分類・語彙の修正をおこなった。制約に関しては Gage and Thapa (2012) と Lyu and Oh (2014) をベースに

表 1 に示すように個人内の制約、対人的制約、構造的制約の 3 因子 10 項目を測定尺度として採用し、「あなたがボランティア活動への参加を検討するにあたり、次の項目はどれぐらい影響がありますか？」という質問文に対して「1. まったく影響がない (あてはまらない)」～「5. 大変影響がある (あてはまる)」の 5 段階で回答を求めた。また、交渉に関しても Son et al., (2008) と Guo and Schneider (2015) をベースに同じく表 1 に示すように、金銭的管理、時間の管理、対人的調和、スキルの獲得の 4 因子 12 項目を測定尺度として採用し、「マラソン大会をはじめとするスポーツボランティア活動に参加するにあたり、あなたは次の項目について日頃からどれぐらい熱心に取り組

表2 因子間相関係数の平方と AVE

	1	2	3	4	5	6	7
1 個人内の制約	.38a						
2 対人的制約	.35	.60b					
3 構造的制約	.44	.43	.55c				
4 お金の管理	.00	.00	.01	.52d			
5 時間の管理	.01	.03	.02	.21	.58e		
6 対人的調和	.00	.00	.01	.04	.26	.66f	
7 スキルの獲得	.00	.00	.00	.16	.48	.33	.79g

んでいますか？」という質問文に対して「1. まったく行っていない(あてはまらない)～5. 常に行っている(あてはまる)」の5段階で回答を求めた。次に、定量的調査として、奈良マラソン2018 ボランティア事前説明会の当日参加者903名に対して文献調査によって抽出された表1に示す質問項目によって構成された調査票を配布し、460部を回収した(回収率50.94%)。その後、回答が不完全なものを取り除き、最終的に400部を分析に用いた。

#### 4.1. 回答者の属性

本研究で分析に用いたサンプルの属性については、性別に関しては男性256名(64.2%)、女性143名(35.8%)、未記入1名であった。次に平均年齢に関しては57.73歳(標準偏差17.54)であった。対象イベントである奈良マラソンは今回で9回目の開催であったが、サンプルの過去の奈良マラソンにおけるボランティア参加経験回数の平均は3.3回(標準偏差3.15)であった。

#### 4.2. 尺度の信頼性および妥当性

本研究で使用した尺度の信頼性および妥当性の確認のため確認的因子分析を行ったところ、 $\chi^2_{df} = 2.744$  ( $2.00 \leq$  基準値  $\leq 3.00$ )、RMSEA (root-mean-square error of approximation) = .066 (基準値  $\leq .080$ )、CFI (comparative fit index) = .92 ( $.90 \leq$  基準値)、SRMR (Standardized Root Mean Square Residual) = .063 (基準値  $\leq .080$ ) とそれぞれの適合度指標が基準値を満たした(Hair et al., 2010; West, Taylor & Wu, 2012)。また、表2に示すように、収束的妥当性を示す平均分散抽出(AVE)は、.38から.79と個人内の制約以外は基準値とされる.50を上回った(Fornell and Larcker, 1981)、構成概念信頼性を示すCRも.70から.92と基準値とされる.60を全て上回った(Bagozzi and Yi, 1988)。さらに、因子間相関の平方とAVEを比較したところ、1

つの因子間(個人内の制約-構造的制約)で基準よりも高い相関が見られたが、それ以外では各因子のAVEを各因子の因子間相関の平方が上回ることはなかった。個人内の制約と構造的制約の関係については、その区分において曖昧さがこれまでの研究でも指摘されている。このことから、弁別的妥当性は確認されたと判断した(Hair et al., 2010)。以上の結果から、本研究で用いられた尺度は、信頼性と妥当性を備えていると判断し、以降の分析に進んだ。

#### 4.3. 個人の属性と生じる制約の関係

レジャー活動への参加を検討するにあたって生じる制約については、するスポーツとみるスポーツともに参加者の性別と生じる制約の関係に着目した研究が数多く行われてきた(Trail et al., 2008; Jun and Kyle, 2011; 備前, 2016)。よって、本研究においても、参加者の性別と生じる制約の関係について検証を行った。レジャー活動への参加を検討するにあたって生じる制約の3つの要因それぞれについて、t検定を用いて男女の各要因の項目に対する回答の平均値の比較を行ったところ、すべての要因において有意な差は見られなかった。この結果、スポーツボランティア(ささえるスポーツ)への参加を検討するにあたって生じる制約については、性別は関係ないことが明らかとなった。

次に、年齢と制約の関係について調べるにあたり、サンプルを年齢の中央値(64.00)を基準に高低の2つのグループに分類し、制約の3つの要因についてt検定を行った。その結果、表3に示すように個人内の制約( $t(398) = 4.329, p < .001$ )と対人的制約( $t(398) = 2.993, p < .01$ )の2つで有意な差がみられた。有意な差が見られたどちらの要因においても、年齢が低いグループの方がボランティア参加を検討するにあたり制約を感じていることが明らかとなった。

#### 4.4. 交渉行動とスポーツボランティア参加の関係

本研究のサンプルの過去1年間のスポーツボランテ

表3 個人属性と制約の関係

	男性 (n=256)		女性 (n=143)		年齢低い (n=199)		年齢高い (n=201)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
個人内の制約	10.11	3.24	9.89	3.44	10.75	3.04	9.35	3.44
対人的制約	6.71	3.06	6.97	3.11	7.25	3.10	6.34	3.01
構造的制約	6.75	2.65	6.78	2.70	6.84	2.55	6.66	2.79

ボランティア活動回数は平均2.63回(標準偏差11.06)であった。スポーツボランティア参加者の日頃の取り組みとボランティア参加の関係について検証を行うために、交渉行動に含まれる4つの要因それぞれについて、中央値(お金の管理:11.00;時間の管理:10.00;対人的調和:8.00;スキルの獲得:9.00)を基準に高いグループと低いグループに分けて、過去1年間のスポーツボランティア活動回数についてt検定を実施した。その結果、表4に示すように時間の管理(t(394)=2.367, p<.05)とスキルの獲得(t(394)=2.742, p<.01)については、グループ間で有意な差が見られた。すなわち、日頃から時間の管理やボランティア参加に向けてスキルの向上につとめると言った取り組みを行うことによって、実際のスポーツボランティア参加回数にも影響があることが明らかとなった。

表4. 交渉行動とボランティア参加回数

	お金の管理		時間の管理		対人的調和		スキルの獲得	
	低い	高い	低い	高い	低い	高い	低い	高い
過去1年間のスポーツボランティア参加回数	2.01 (4.08)	3.12 (14.26)	1.32 (2.05)	3.89 (15.27)	2.45 (12.03)	2.76 (10.35)	1.10 (1.60)	3.50 (13.72)

( )は標準偏差を示す

## 5. まとめ

今回、実際にスポーツイベントにボランティアとして参加した人を対象とした調査から、スポーツボランティアに参加するにあたり生じる制約とその制約を解消する取り組みである交渉がボランティア参加に及ぼす影響について検証を行った。その結果、制約については性別による影響は見られなかったが、年齢に関しては年齢の低いグループの方がボランティア参加を検討するにあたり制約を感じていることが明らかとなった。今回の研究では、分析を行うにあたり年齢の中央値を基準にサンプルを10歳から63歳までの年齢が低いグループと、64歳以上の年齢が高いグループに分類

した。近年では、定年年齢の引き上げや定年後の継続雇用制度により64歳までを生産活動に従事しうる年齢(生産年齢人口)と捉えている。学生を対象にボランティアに参加するにあたり生じる制約について調査を行った研究でも、制約要因として「時間がないこと」や「ボランティア以外の他の活動」が挙げられていた

(Gage and Thapa, 2012)。今回の調査参加者の平均年齢が57.73歳(標準偏差17.54)であったことから、定年を迎える前の世代はボランティア活動に参加するにあたり、やはり仕事をはじめとする様々な制約があることがわかった。その一方で、定年を迎え仕事を退職した人たちはボランティアへの関わりに対して熱心であり、若い世代よりも参加を検討するにあたり感じる制約も少ないことから、自身の生活に合わせたボランティア参加が可能になっていると言えるだろう。

また、今回の調査の結果から、日頃から時間の管理やスキルの獲得といった行動に取り組むことにより、実際のボランティア参加の回数にも影響が出るということが明らかとなった。これらの結果は、今後全国各地において大規模なスポーツイベントを開催する際に現在課題として挙げられているボランティアスタッフの獲得という問題の解決に貢献する重要なエビデンスになると思われる。

今後スポーツイベントにおいてボランティアを募集するにあたっては、シニア層への積極的なアプローチを増やすとともに、イベント前からボランティアに関する情報の提供やボランティア活動を行うために必要な技能の習得にむけた講習会の開催が有効ではないだろうか。イベントが開催される地域に長く住む人々は、その地域に対して強い愛着を持つとされる(二宮, 2011)。その意味において、地域住民の人間関係や地域への愛着を向上させる装置としてマラソン大会をはじめとする地域で開催されるスポーツイベントは大きな役割を果たし、そこにささえるスポーツとして参画するスポーツボランティアは地域の活性化に対しても新たな価値を見出すことに繋がると考えられる。

### 【参考文献】

- Bagozzi, R. P., & Yi, Y. (1988) On the evaluation of structural equation models. *Journal of the Academy of Marketing Science*, 16(1): 74-94.
- 備前嘉文・二宮浩彰・庄子博人(2016) 市民マラソンランナーが都市型市民マラソン大会への参加を検討するにあたり生じる構造的制約. *生涯スポーツ学研究*, 13(2): 1-14.
- Casper, J.M., Bocarro, J.N., Kanters, M.A., and Floyd,

- M.F. (2011) Measurement properties of constraints to sport participation: a psychometric examination with adolescents. *Leisure Sciences: An Interdisciplinary Journal*, 33(2):127-146.
- Crowford, D. W., & Godbey, G. (1987) Reconceptualizing barriers to family leisure. *Leisure Sciences*, 9: 119-127.
- Fornell, C., & Larcker, D. F. (1981) Evaluating Structural Equation Models with Unobservable Variables and Measurement Error. *Journal of Marketing Research*, 18(1) 39-50.
- Gage III. R. L., & Thapa. B., (2012) Motivations and constraints among college students: Analysis of the volunteer function inventory and leisure constraints models. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 41(3):405-430.
- Guo, T., & Schneider, I. (2015) Measurement properties and cross-cultural equivalence of negotiation with outdoor recreation constraints. *Journal of Leisure Research*, 47(1): 125-153.
- Hair, J. F., Black, W. C., Babin, B. J., Anderson, R. E., & Tatham, R. L. (2010). *Multivariate data analysis* (7<sup>th</sup> ed.). Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall.
- Hubbard, D. R., & Mannell, R.C. (2001) Testing competing models of leisure constraints negotiation process in a corporate employee recreation setting. *Leisure Science*, 23: 145-163.
- Jun, J., & Kyle, G.T. (2011) The effect of identity conflict/facilitation on the experience of constraints to leisure and constraints negotiation. *Journal of Leisure Research*, 43(2) :176-204.
- Kim, Y.K., and Trail, G. (2010) Constraints and motivators: A new model to explain sport consumer behavior. *Journal of Sport management*, 24: 190-210.
- Lyu. S.O., & Oh, C.O. (2014) Recreationists' constraints negotiation process for continual leisure engagement. *Leisure Sciences*, 36: 479-497.
- 松永敬子 (2012) 「京都マラソン 2012」におけるボランティア参加者の動機に関する研究：自発的参加と非自発的参加との比較. 龍谷大学経営学論集, 52(2/3) : 55-63.
- 松岡宏高・小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機. 体育の科学, 52: 277-284.
- 二宮浩彰：プロスポーツ観戦者行動におけるチームに対する愛着とホームタウンへの地域愛着. 同志社スポーツ健康科学, 3:14-21.
- Patrick, J.F., Backman, S.J., Bixler, R., and Norman, W.C. (2001) Analysis of golfer motivations and constraints by experience use history. *Journal of Leisure Research*, 33:56-70.
- Son, J., Mowen, A., & Kerstetter, D. (2008). Testing alternative leisure constraint negotiation models: an extension of Hubbard and Mannell's study. *Leisure Science*, 30(3) : 198-216.
- 田引俊和 (2008) 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究. 医療福祉研究, 4 : 98-107.
- Trail, G., Robinson, M., and Kim, Y.K. (2008) Sport consumer behavior: a test group differences on structural constraints. *Sport Marketing Quarterly*, 17:190-200.
- West, S. G., Taylor, A. B., & Wu, W. (2012). Model fit and model selection in structural equation modeling. In R. H. Hoyle (Ed.), *Handbook of structural equation modeling* (pp. 209-231). New York, NY: Guilford Press.

#### 【謝辞】

本研究の調査においては、奈良マラソン実行委員会のご協力により、奈良マラソン2018のボランティアを対象とした貴重なデータを収集することができました。また、多くのボランティアの方々が、学術調査の趣旨をご理解いただきご回答くださいました。ここに感謝の意を表します。

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。